



中村俊定文庫
文庫 18
524



寂榮

Handwritten text in a cursive script, possibly a signature or a title, located at the top of the right page.

Handwritten mark or character, possibly a stylized '1' or a similar symbol, located in the upper right quadrant of the right page.

Main body of handwritten text in a cursive script, spanning across the bottom of the right page and the top of the left page.

玄来の言歌阿見の言ふより予ふ来の言ふよりとて破る
也と云ふ一して御言ふ言ふ

来書回物と云ふも予三神を毎々相持と書ふより予
方又諸字のつとる言ふ

玄来阿見の言作す一予是の言一文中の言
界一終ると云ふ

来書回物と云ふも予三神を毎々相持と書ふより予
玄来阿見の言作す一予是の言一文中の言
一も予也平能書と云ふ一此の言の書角

から十一一と書すや二二入るは二二と書す

平のつと浪作集あつた集に其角の撰集を並べ
と中阿見の言外に角のつとる言を並べ
来書回物と云ふも予三神を毎々相持と書ふより予

玄来阿見の言作す一予是の言一文中の言
以論と云ふも予三神を毎々相持と書ふより予
と云ふも予三神を毎々相持と書ふより予
と云ふも予三神を毎々相持と書ふより予
阿見の言作す

事書にみまをそ仰りて新しき事とて海をくぐりて
こゝに女孺とてし

去来日阿比古神様を以て其角に給ふ事却て
の神と稱ししに其角の神は海に力と能く
て一に二に三にありて又十にありて其角
其神を齋にす角にありて其角に

昔日去来日阿比古神とて其角にありて其角に
の神と稱ししに其角の神は海に力と能く
初に地神と神と合して其角にありて其角に

言も其神ありて其角の神は海に力と能く
古の事とて其角の神とて其角にありて其角に
事書にみまをそ仰りて新しき事とて海をくぐりて
こゝに女孺とてし

去来日阿比古神様を以て其角に給ふ事却て
の神と稱ししに其角の神は海に力と能く
て一に二に三にありて又十にありて其角
其神を齋にす角にありて其角に

浮韻記を信徳う七五韻書と云ふの要見は此れ也
 みる一書に一も浮韻記の由をのむて虚粟原の
 日之松長子なるは松長元君後継者なり
 二月拾何のりくする所を以て成文書の號を記
 すとすもまた此後にあはも是れを記すとす
 今 せん

未書は不丹境の二つは
 著意向しとせり此は也
 人後へのことせんは他方湖南の沙石也

其書は此の書に依りてなりていふ事は一合書をか
 してゐる事なりとあり。此は新書に平字の考に
 此向の地とありて海に下はるる事いふこと感懐す
 及の二語向ありてある事ある事いふこと此向の事
 此向の事いふこと地とありてある事いふこと此向の事
 此事ある事ある事いふこと此向の事いふこと此
 此向の事いふこと此向の事いふこと此向の事
 の事いふこと此向の事いふこと此向の事
 てある事いふこと此向の事いふこと此向の事

雑話

かゝる文の著者もさういふ大に廣くさういふ
市人も類ある所以さういふ流俗の言はきかたは
各家の言はきかたもさういふ和歌の言はきかたも
和歌の言はきかたもさういふ和歌の言はきかたも
その言はきかたもさういふ和歌の言はきかたも
くすくすといふ連音の底さういふ言はきかたも
この言はきかたもさういふ和歌の言はきかたも
家建の言はきかたもさういふ和歌の言はきかたも

お西——さういふ和歌の言はきかたも
こゝろ——さういふ和歌の言はきかたも
間架布直——さういふ和歌の言はきかたも
お春——さういふ和歌の言はきかたも
何故よとてさういふ和歌の言はきかたも
嫁の式に何の言はきかたもさういふ和歌の言はきかたも
よの娘をさういふ和歌の言はきかたも
けり——和歌の言はきかたもさういふ和歌の言はきかたも
よの娘をさういふ和歌の言はきかたも

昔史記の卷に佛塔の式法何れの言を用傳へと句
けしハ佛塔言ハ先賢の言ハ一ト云ハ九ト一
と云ハ九ト一ト云ハ九ト一ト云ハ九ト一

中より心ヲテ執むるを懸えりや 篇

形影の如くさくさくおろまは 晋子

こゝろをまたおろさくあはるる

こゝろをまたおろさくあはるる 葉の畑 篇

重個人ハ古代のすくすくや 篇

運ぶかたのすくすくのすくすく 篇

此のころも知く 首葉の細交考葉はさりと譯せり
すも何れもさう早くも毛國を重個人のふらさく 此葉の
中を葉の畑さくすくをたたくかきり

袖孫抄の序

佛塔傳の事世に周くす 予年を述ぶ通はかひ
氣力と云ふ神は伝 同孫と云ふ時を妙何を諸事
かくいひしはさう行はる佛塔の傳と云ふは力
人何れもさう早くも毛國を重個人のふらさく 此葉の
合分といふも合分といふ者といふも合分といふも合分

ちとせしるんつゝあるをりて
不の部当の大事なるをさしきくし何れも初学
のべたせしむるをてし

若くは其古学を有るは白かいはりともて疑の文字をいふ
ふいふともいふの詞がたが反か歎息の文字を深き
ありと云む易くは初学字通家親筆に付る也下の
道着ても其事感ずる兼あつた文字をかきし
言語二首一の意よりきくはかく又同
初学部の初学を免許してはむ事能りしむるた

付る者さうしむるのえ協するも信じて
ても終るるをさしきくは初学字通家親筆に付る也下の
一或るは信じてはむ事能りしむるた
若くは其古学を有るは白かいはりともて疑の文字をいふ
ふいふともいふの詞がたが反か歎息の文字を深き
ありと云む易くは初学字通家親筆に付る也下の
道着ても其事感ずる兼あつた文字をかきし
言語二首一の意よりきくはかく又同
初学部の初学を免許してはむ事能りしむるた

己と情を他とし事あらんとして世の事
悲とて自ら正しき

平是亦の事いふ物せりといふ事いひしん初学の入
海と稱して習作といふ心持といふ事

疔類といふこといへりていふ事

疔類といふ事いへりていふ事

疔類といふ事いへりていふ事

此方の事いふ事いへりていふ事

八九百といふ事いへりていふ事

九九百といふ事いへりていふ事

柳のらハれろみ物いふこといへりていふ事
の事いふこといへりていふ事
かといふこといへりていふ事

京中いふ事いへりていふ事

世の事いへりていふ事

世の事いへりていふ事

世の事いへりていふ事

世の事いへりていふ事

世の事いへりていふ事

又、小袖をいあもりつゝのせきより丸か又遠く能く

泊船在松柳

書あやまこくそを着たるる廿二日 翁

第うのよまの故かきり男二年

うらぶのちるまを請詞容語とひつゝあ人懐むし
男のめつるまきつる首つらつらとあ對のつえ

いふにいふに蓮の花えり年 季

いふのちるまをいふるつらつらとあ對のつえ
凡前よころほくく詳よとせしやこころのいふ
ことあ丸は圓は丸いふるつらつらとあ對のつえ

あまうとさうまのちのちのちをさうまをさうま
ゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき
り柳よとさうまのちのちのちをさうまをさうま
先客よいふるつらつらとあ對のつえ
凡亦ゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき
ゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき
ゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき
ゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき
ゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき
ゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき

馬車ありぬけりけりしを

昔は諸君の御事と申すに、世に於ては、
うらやまの心持とあるは、路の物やを
し、たゞは、御事と申すに、世に於ては、
権亮の御事と申すに、世に於ては、
不謹慎なる事

御事と申すに、世に於ては、

言ふに、世に於ては、

と云ふに、世に於ては、

と云ふに、世に於ては、

と云ふに、世に於ては、

世に於ては、

山本の御事と申すに、世に於ては、

御事と申すに、世に於ては、

世に於ては、

世に於ては、

世に於ては、

世に於ては、

世に於ては、

世に於ては、

常あそぶをたて 解法にたたりぬ 爲

とあるをたてあふまをたを佛をち

可憐さすを憐の軍の初なる

はちちを初なるのくは解くことなるをくし 爲の

の解の集あれども五年はちちを解著す

可憐なるあふまをたの初なるをくし 爲の

は初なるのしり心と解くこと 爲の 爲の 爲の

の信云とあるをくし 爲の 爲の 爲の

他やま 爲の 爲の 爲の

初なるのしり心と解くこと 爲の 爲の 爲の

すの初なるのしり心と解くこと 爲の 爲の 爲の

すの初なるのしり心と解くこと 爲の 爲の 爲の

すの初なるのしり心と解くこと 爲の 爲の 爲の

すの初なるのしり心と解くこと 爲の 爲の 爲の

すの初なるのしり心と解くこと 爲の 爲の 爲の

すの初なるのしり心と解くこと 爲の 爲の 爲の

すの初なるのしり心と解くこと 爲の 爲の 爲の

すの初なるのしり心と解くこと 爲の 爲の 爲の

此のこころを思ふは情もろくも上師に
月情もあまきれは初めはこころを其の由
の由に日ひのこころあるに母子のこころ
つゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
こころ深くあまきれは初めはこころを其
せり源修れ初めは初めは初めは初めは
の考へてこころもろくも上師に
さへいと西あまきれは初めは初めは
同じさへいと西あまきれは初めは

さへいと西あまきれは初めは初めは
志すそは縁原とは宿のまゝ
都もさへいと西あまきれは初めは
さへいと西あまきれは初めは初めは
初めは初めは初めは初めは初めは
さへいと西あまきれは初めは初めは
さへいと西あまきれは初めは初めは
さへいと西あまきれは初めは初めは
さへいと西あまきれは初めは初めは
さへいと西あまきれは初めは初めは

為らむとては花をばさるるは流るるはさるる
流るるはさるるはさるるは流るるはさるる
心持のまじりて申すは花をばさるるは流るるはさるる
流るるはさるるはさるるは流るるはさるる
人見のまじりて何と流るるはさるるは流るるはさるる
空のまじりて何と流るるはさるるは流るるはさるる
舟のまじりて何と流るるはさるるは流るるはさるる
几帳屏風の影に花をばさるるは流るるはさるる
石井のまじりて何と流るるはさるるは流るるはさるる

又
其朝野子

花はさるるは流るるはさるるは流るるはさるる
心持のまじりて何と流るるはさるるは流るるはさるる

流るるはさるるはさるるは流るるはさるる
音子

流るるはさるるはさるるは流るるはさるる
花をばさるるは流るるはさるるは流るるはさるる

花をばさるるは流るるはさるるは流るるはさるる
流るるはさるるはさるるは流るるはさるる
流るるはさるるはさるるは流るるはさるる
流るるはさるるはさるるは流るるはさるる

空に帰されしとて修徳の人の語をきかば
社僧のありしころはなほ目も道も
一尚きまを初に社僧のありしころはなほ
利休のれとてありしころはなほ
えー始ると云昔子定尔とて言曰初のりあり
かきしとてありしころはなほ
昔の日記のむを成就せしころはなほ
之字微し事教憲のありしころはなほ
ひしとてありしころはなほ

とありしとて昔の日記のむを成就せしころはなほ
さき帰るありしころはなほ
遠くよりしころはなほ

修徳の人の語をきかば

いそみの詞の以後とてありしころはなほ
厚く水鏡の遺立の時加賀山松梅林院主能徳
のくちりしころはなほ
のくちりしころはなほ
えとてありしころはなほ

能徳

とく道に女一と一 予下紙に院を訊い世史に
まゝえ一何をもとく 院の序にせしける 端子に由
須とて家お隣の人ある 院又法華世にまゝか一内
え縁に一をを試る 奥相り 師の道の子能兼
ゆふ對法あり一は氣まを對一 世のの法縁ハ
とや一のの法縁と一有に

法縁を芒にまを 中少をう那 能兼
とあり一は氣あと氣をうり一ととよのののの
さうの法あり一まもも由縁あり かつらまされりる

又月廿五日のしつとを侍りて 散るる事あり
一侍りて 講ありとありて 予は 好色無飽之謂
院とて事を題あり一あるをむ 且少方廿五日
とありて ぬを移りたり

とありて ありとあり一の 史なるを 具し一と
すて 院の法にありとあり 史なるを 具し一と
て 院の法にありとあり 史なるを 具し一と
の 史なるを 具し一とあり 史なるを 具し一と
とあり 史なるを 具し一とあり 史なるを 具し一と
とあり 史なるを 具し一とあり 史なるを 具し一と

山崎先生の御書に云く

この書は是邊并書の中にも一冊として記し置か
るべきものなりと云ふは又も是れを記すに
かき置かざるは其の意を以てし

一は自記の事なり

行物に事從可有也

江
羊素

何れも其意を以てし

他
心
如

其意を以てし又其意を以てし
のるは其意を以てし其意を以てし

其意を以てし其意を以てし

其意を以てし其意を以てし

江
平

其意を以てし其意を以てし

其意を以てし其意を以てし

雅話終

志志とる後序

籍より調を移つて下管にあまをいへ
ちよつとくふりの長短に意をわけていへ
いふも八風律にあらざるの一方地塔の
不審察すともせらるる自然なるるを
あつたてて今より強弱の差をいへ
何れも又珍珍とて四巻をおらるる世
寂寥とて唯々郷土の事とていへ
らるる世とていへ

不審察の事とていへ
中よりあらせ

安永丙申春二月

暮雨巻判

桃居写之

1844



